

歴史は未来の羅針盤

温故知新

今回は、近江日野商人館からお届けします。
商人館では、昨年度の一年間に全国四十二都道府県から入館者がありました。商人館こそが日野町の正面玄関である意識し、山中兵右衛門家の二百年前の家憲「小さなお客様こそ特に大切に」の心でお迎えしています。

日野商人の商業道徳

最近、新聞やテレビなどで、よく「CSR」という三文字を目にするがあります。

これは英単語の頭文字ですが、日本語では「企業道徳」とか、「商業道徳」、「商人道徳」などの意味を持つ言葉です。

経済が深刻な不況になったり、極端な好景気になったりすると、しばしば商業道徳が問題となり、つい最近の日本でも、企業や老舗による「偽装商い」が大きな社会問題となりました。

今を去ること、およそ三百年前、元禄時代のバブルがはじけ、悪徳業者が世にはびこった時、石田梅岩という人が『都鄙問答』という本を著しました。その中で、社会全体を豊かにする商業活動を盛んにするために、商人個々による「勤勉、誠実、正直」な商いが必要であると力説しています。彼のこのような説は、「心学」と

か、「石門心学」と呼ばれ、多くの弟子に受け継がれ、江戸時代の終わり頃には全国に広がった商業道徳です。

日野商人や近江商人の商法や生き様を表す言葉として、この「勤勉、誠実、正直」という言葉がこれまで盛んに用いられ、美化、称賛されてきましたが、正しく言えば、日野商人や近江商人も「心学の商業道徳をしっかりと身に付けていた」と言うべきでしょう。

心学の影響を受けていた日野商人の商業道徳について、少し詳しく見てみましょう。

近江商人の中でも、日野商人のみが「日野大当番仲間」と呼ばれる商人仲間（組合）を組織し、会員には、「鑑札」とか、「印札」、「合符」などと呼ばれる会員証（写真）が発行されていました。

この鑑札は、会員個々が商いの旅先で定宿（組合指定の旅館）を利用して時などの身分証明書として主に使用されました。その裏面

には、会員名や通し番号などとともに、「仁」、「義」、「礼」、「智」、「信」などの漢字が一字ずつ墨書きされています。

これまで、この鑑札の文字に注目した研究者はありませんが、心学の商業道徳で大切にされる徳目です。かつて聖徳太子も理想的な政治を求めて役人の職階（冠位十二階）に採用した徳目で、中国伝来の儒教の教えです。それぞれ次のような意味を表しています。

「仁」 〓 相手を思いやる心。「義」 〓 人としての正しい心。「礼」 〓 相手をうやまう心。「智」 〓 世に役立つ工夫をこらす心。「信」 〓 世間から信用される心。つまり、「仁・義・礼・智の実践こそが信を生む」という商業道徳なのです。

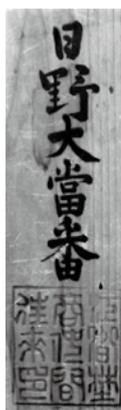
このような徳目を鑑札にわざわざ採用した背景には、商業道徳に反しない商いをするよう、大当番仲間が会員個々に指導していたことを示しています。鑑札に徳目を記すのは、嘉永三

（一八五〇）年の頃からですが、大当番仲間が心学を積極的に採用したと言うよりも、むしろ、全国に広まりつつある心学の商業道徳を身に付けた商人でなければ、もはや世間に通用しない時代になったとの判断が、大当番仲間の指導者層にあった様子です。

すでに十九世紀の初め頃から、時代の先読みに敏感な商人は、積極的に心学を学び、子孫に残す商業道徳を家憲に著したり、石田梅岩の弟子と交友・師弟関係を持つたりするなど、日野商人の世界でも、商業道徳のあり方に関心を持つ商人が急激に増加しつつありました。

このような時代の風潮に合わせ、鑑札に徳目が記されたり、心学のテキストが日野地方でも出版されたりするなど、心学が日野の人々の間にも広く浸透していきました。

大当番仲間の鑑札



表

「義」と記されています



裏